

令和6年度 自己評価結果報告書（看護学科3年課程・2年課程）

1. 自己点検・自己評価の目的

学則第34条

「教育水準の向上を図り、本学校の目的及び社会的使命を達成するため、教育活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。」

上記、学則に則り、評価の結果から達成度や妥当性など組織的・継続的に改善を図り、学校関係者の理解・協力を得て、職員一丸となって教育水準の維持・向上、特色のある学校運営につなげることを目的としています。

2. 令和6年度自己評価の実施方法

- ①評価期間 : R6.4～R7.3
- ②評価者 : 学校長・副学校長・事務局長・庶務主任・専任教員
- ③集計・報告書作成 : 自己評価委員（学校長・副学校長・事務局長・庶務主任
教務課長・2年課程主任・3年課程主任・3年課程主任補佐）

※R7.5.20（火）学校関係者評価委員会開催予定

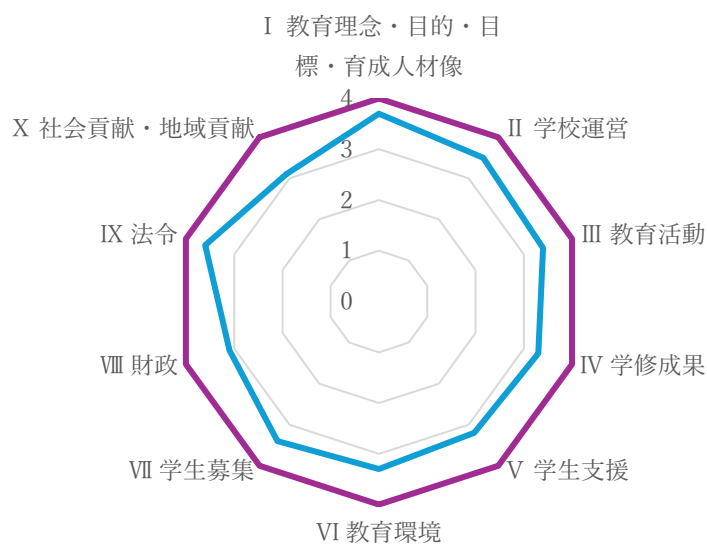
3. 評価集計結果

【評価尺度 4：適切 3：ほぼ適切 2：やや不適切 1：不適切】

評価（大項目）	3年課程（前年度）	2年課程（前年度）
I 教育理念・目的・目標、育成人材像	3.7 (3.6)	3.5 (3.5)
II 学校運営	3.5 (3.1)	3.3 (3.1)
III 教育活動	3.4 (3.2)	3.3 (3.2)
IV 学修成果	3.3 (2.9)	3.2 (2.8)
V 学生支援	3.2 (3.1)	3.2 (3)
VI 教育環境	3.3 (3.1)	3.3 (3.1)
VII 学生募集	3.4 (3.3)	
VIII 財政	3.1 (2.9)	3.3 (2.9)
IX 法令	3.1 (3.3)	3.5 (3)
X 社会貢献・地域貢献	3.1 (3.0)	2.9 (2.7)

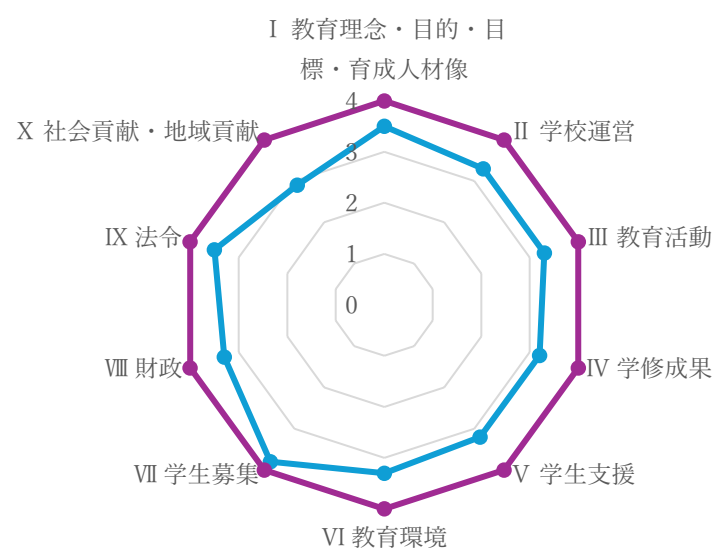
3年課程

R6年度自己評価結果



2年課程

R6年度自己評価結果



I 教育理念・目的・目標・育成人材像

R5年度3年課程開設を機に、社会のニーズ、新カリキュラムの主旨を踏まえて、教育理念・目的・目標を設定した。教員・学生とともに、教育活動・学習の指針とし、定期面接時には学年別到達目標と合わせ、振り返りを行い、目指すところの確認、学生支援につなげている。

また、教育理念・目的等は学生便覧、学校案内、ホームページに明記し周知を図っている。

II 学校運営

設立目的、教育理念等を踏まえて、事業計画を立案し学校運営を行っている。

円滑な運営を図るため学則・細則に示された運営会議（学校運営会議・教務会議・臨床指導者会議・講師会議・入試委員会義等）に則り、定期的に会の開催・審議がされ方針が提示されており、運営組織・意思決定機関機能は有効に機能している。

成績管理・図書管理等は、昨年度同様、学校独自の方法で管理をしている。支障は生じていないが情報システム化による業務の効率化については、予算と合わせ引き続き今後の課題としていく。

（学生確保状況については、Ⅶ学生募集で述べる）

III 教育活動

新カリキュラムのもと3年課程を開設し2年が経過した。昨年度課題となっていた解剖生理学・病態学等専門基礎分野の知識の定着については、学生の苦手意識や専門用語の難しさや複雑さからなかなか1年次には定着しない。しかし、2年次になると基礎看護学実習Ⅲにて、受け持ち患者の疾患を理解し、対象の身体的側面を理解する必要性を自ら感じ、学習シートを用いて解剖生理から疾患の理解に繋げようとする努力がみえ、成果が見えてきている学生もいる。また、実習を通して専門基礎分野の知識を想起し、その知識が看護に必要なことも自ら感じ、主体的な学習へとつながっている。

令和6年度より、外部講師への授業評価（リフレクションシート）を取り入れた。講師の授業回数によって実施する回数を決め、最終回は必ず学生の振り返りを行った。その結果を講師に一読していただき、授業内容の振り返りや授業方法の修正などを行っていただいた。学生の振り返りには、感想の記載が多いが、きちんと振り返りし、学んだことを表現している学生は思考の深さができてきている。また、授業への取り組みのモチベーションアップにつながっている。ご協力いただいた講師の方々にとっても学生の反応が良い刺激になっていると考える。授業評価の方法については、授業者および学習者の両者が、授業リフレクションによって前向きに授業の改善に取り組めるよう回数や方法、評価内容など検討を重ねる余地がある。

教育方法の工夫・開発という点は、各講師・教員に委ねられている部分が多い。今年度、教員は研修動画の「期間中見放題プラン」を受講し、学生の気質を知り学生指導に役立て、実習の組み立ての振り返りを行うことができた。教職員の資質向上のため、研修の受講を今後も促して行く。そして、看護過程の展開は看護を思考していくうえで大事な基礎となる。その思考プロセスをもとに実習を行い、対象を理解していく。つまり、このプロセスでの看護の視点が教員も理解していないと学生指導はできないことになる。2年課程から3年課程に変更した時点で、枠組みを変更した。今後、教員の指導力の強化のために学習していく必要がある。また、看護は病院で展開するこ

とだけではない。地域社会での医療・福祉・保健にも携わることになる。そのつながりを含めて授業や実習でも目標をもち、対象の理解につながるようにしたい。

また、領域横断科目も2年生に始まった。学校として新カリキュラムになり、初めての科目設定である。成人看護学だけでなく、他の老年・小児・母性・精神看護学それぞれの事例で学習することも行った。科目としての目的を明確にし、その目的から学生が思考するくせをつけることや協同学習（グループワーク）で他者の意見を聴き、他者の意見を受け入れる柔軟性や自分から意見を発信する発信力、伝達の仕方の工夫など、今後のチーム医療で発信者となれることも期待できる。積み重ねて実施していく。

臨地実習においては指導者から実践面での指導かつ学生のサポート役も担っていただいた。毎日のミーティング、定期的な会議を開き協力して指導に当たる体制作りに協力をいただいている。

実習指導や生活指導、学習指導を行う上で、教員が学生に対する個人的感情・バイアスが顕著になってしまうことがある。このことが学生の評価につながっているのではないかという学生からの教員の信頼面への懸念がでてくる。教員は調整役に徹し、教員同志の情報共有や教員同士で指摘し合うなど、教員の個人的感情は教育ではないということを肝に銘じ、学習環境として学生が自主的に学習できる関係性を築いていく。客観的立場にあるカウンセリングを活用し、カウンセラーとの連携を図っていく必要がある。

IV 学修成果

3年課程

令和7年度は、3年課程最初の国家試験となる。専門職者としての基礎的な能力を身につけるとともに合格率100%を目指し、学生自らが主体的に学習に取り組めるよう入学時から計画的に国試対策に取り組んでいる。学習・実習が進むにつれ、学生自身のキャリア目標が明確となり成果が見え始めている。学年別に実施している国試模試は、R6年度の国試終了後のアンケートでは、回数・内容共に効果的であったと回答を得ているため、国試の傾向分析、適した模試の検討等情報をもとに、3年課程の学生の特徴を踏まえた国試対策、そして国試合格につなげていく。

留年者（科目履修生）2名については、当該学年時落とした科目の単位取得、希望聴講等次年度新たな学年にスムーズに乗れるよう主体的な学習の促しと支援を続けてきた。退学者2名については、学生生活での躓き、進路への迷いが主な原因となった。カウンセリング、面接を重ね支援を続けてきての結果である。今後も学生の変化に早期に気づきタイムリーに相談に乗れるような関わりと支援を継続していく。

卒業後の就業に関しては、就職ガイダンス（病医院の紹介、就学資金等）を入学後の早い時期に実施し、地元への就業率が向上するよう計画（R7.4.24 実施予定：1年生参加）を進めている。附属病院をもたない医師会立の学校としては、実習・講義・就職等の運営にあたり地元の病院と連携を取りあっていくことが重要となる。地元の中核病院からは、看護職員の推薦採用枠の指定校にさせていただいており、今後も教育、教育外活動等様々な面において協力体制を取り合っていくことが必要となる。

助産師への進学を希望する学生もあり、相談に乗れる体制も整えていきたい。

2年課程

R6 年度、3 年生 1 名が後半体調を崩し、面接を重ねたが長期療養が必要となり退学となる。卒業を目前にした退学となり、残念であるが、3 年課程においても必要に応じ進路に関する相談に乗り支援をしていきたい。

課題として、昨年から引き続き卒業後の状況を把握できていない状況である。卒業生の追跡調査を行い、教育活動の改善に活かしていくための具体的な方法を検討していく。

V 学生支援

学生相談については、精神面でのサポートとしてカウンセラーを配置している。教員側もタイムリーにかつ定期的に一斉面接を行い学習面、学校生活等における相談を受けサポートにあたっている。また、学習支援・学校生活等については、保護者との連携が必要となる。学習面においては成績通知書を郵送しサポートが必要な学生については保護者との面談を実施しているが、カンニング行為、未成年の喫煙行動等については家族への情報提供、協力をかたくなに拒否する学生もあり家庭状況・親子関係を踏まえた対応が求められる。

経済的支援としては、高等教育修学支援新制度の対象校に認定されたため、来年度より住民税非課税等の学生は申請により経済的支援（授業料等減免と給付型奨学金）を受けることができるようになった。さらに経済的な不安を抱え修学資金等を希望する学生の相談窓口として、専任の教員を配置した。R5 年度より設けた成績優秀者奨学金については、学生達の学習への動機づけ、経済的負担の緩和につながっている。

その他通学に要する経済的負担の軽減を目的に、R7 年度より定期代・駐車場の一部を支援する体制を整えるなど、あらゆる支援への取り組みを行っている。

課題としては、社会人学生への経済的支援として、専門実践教育訓練給付金の申請を卒業実績が出せる R8 年度には早急に行うことが必要である。

VI 教育環境

運営会議において、学生・教員の要望を反映し学校設備の改修や教材の充実を図るための予算編成が行われている。教材器具に関しては、古くなった人体模型の買い替え、マイク・スピーカー等視聴覚機材の補充を図った。また、公立大学及び産院から、電動ベッド、リクライニング車椅子、高齢者体験セット、コーケンベビー、新生児用ベッドその他多くの教材の無償譲渡を受けることができた。必要な補修を施し活用していきたい。

乾燥等による感染症のまん延防止を考え、各教室に加湿器に加え新たに高性能の空気洗浄機（エアドッグ）を配置し教室環境を整えた。

昨年度からの課題となっていた学生トイレの洋式化については、予算の兼ね合いもあり毎年一箇所ずつ計画的に進めていく予定であり、本年度一箇所洋式にした。

学生自治会活動は、まだ 3 学年が揃わず十分な運営には至っていない。

防災訓練は年 2 回実施し、学生・教職員の安全を図っている。防災設備は建築基準法に基づき定

期調査を受けている。

Ⅶ 学生募集

定期的な経営戦略委員会、学校運営会議で検討をしながら学生確保に向けた取り組みを進めている。R6年度からR7年度に向けては、新たな学生支援事業として公共交通機関を利用する学生に定期代、駐車代の一部支援、また高等教育修学支援新制度の対象校に認定されたため、対象となる学生の申請により授業料等の免除・減額及び給付型奨学金の支給を受けることが可能となった。さらに看護職の魅力を早期から伝えるために従来のオープンキャンパスに加え3月には、高校1・2年生及びご家族を対象としたオープンキャンパスを新規に計画、その他学生が集まらない要因の1つとして知名度の低さが考えられたため、テレビコマーシャル、広報うえだ、週刊上田、信毎等に記事を掲載する等、可能な限りの広報活動に取り組んでいるが、大学化、少子化の影響は大きい。社会人入学生への支援の充実（専門実践教育訓練給付金申請）、留学生の入学も視野に入れ学生確保に努めていかななくてはならない。

Ⅷ 財政

学生からの徴収金のほか、医師会からの繰入金や県・県医師会・市からの補助金等をもとに予算・収支計画をたてており、また、予算収支計画については年度途中にも見直しを行い、適正かつ有効予算執行に努めている。

5月には、会計事務所による監査及び医師会幹事による監査を行っており、財務情報については学校ホームページにおいて公開している。

補助金や繰入金に頼らない健全な財政を目指し努力しているが、学生確保の問題は非常に大きく、行政からの財政支援の継続とともに大きな課題である。R8年度以降の上田市からの補助が不確定であることが一番の不安材料である。

Ⅸ 法令

法令、専修学校設置基準などを遵守し、適正な運営を行っている。

学校評価結果（自己評価・学校関係者評価）については、ホームページで公開している。

Ⅹ 社会貢献・地域貢献

多くの学生が地元就職をしており、地域貢献への役割を果たしている。（就業状況参照）
年2回の、学校周辺の地域清掃は継続している。本年度の特別講演会は、一般参加者を週刊上田で募り約70名の参加を得ることができた。教育資源や施設の活用という面ではまだ十分ではないが、看護学生や学校を知っていただく機会となった。

実習施設である千曲荘病院、信州上田医療センターの防災訓練に学生ボランティア、上田市子育て家族応援事業のボランティアとして参加させていただく機会を得た。

《要約》

2年課程・3年課程ともに大項目Ⅰ～Ⅹまでの評価項目のうちすべて昨年度より評価が上がっており、Ⅹ以外は評価尺度の「ほぼ適切である」「3以上」を満たしている。

Ⅰ 教育理念・目的・目標、育成人材像	・R5年度3年課程開設を機に、社会のニーズ、新カリキュラムの主旨を踏まえ、教育理念・目的・目標、育成人材像の再設定を行った。学生は学年毎の学習の指針として、また、教員は教育活動の指針として、学習支援につなげることができている。 ・ホームページ、学校案内、学生便覧に明記し、周知を図っている。
Ⅱ 学校運営	・上記を踏まえた事業計画、学則・細則に則り運営がなされている。 (学生確保状況については、Ⅶ学生募集で述べる)
Ⅲ 教育活動	・昨年課題となっていた看護の初学者である1年生の解剖生理学・病態学等の知識定着の弱さについては、昨年同様、専門用語の難しさ等1年生は苦戦している状況がみえた。しかし2年次になり臨地実習を体験していく中で、受持ち患者の疾患を理解することの必要性を自ら感じ、努力がみえ、知識の定着さらには主体的に学習に取り組む姿勢へと繋がってきた。今後の成長（3年次の実習・国試）を期待していく。 ・臨地実習における実習指導者との連携については、毎日のミーティング、定期的な会議により協力体制を図ることができている。また学生からの指導に対する満足度も高く、モチベーションアップにつながっている。
Ⅳ 学修成果	・令和7年度には、3年課程の学生が初めての国家試験を受けることとなる。合格率100%を目指し1年次から学習レベルに応じた国家試験模試を計画的に実施している。教員も国試対策のセミナーを受講し、3年課程の特徴を踏まえサポートを継続していく。 ・留年者2名（2年に進級できず）については、単位修得、苦手科目の希望聴講等不足を補い次年度への準備を整えた。2名の退学者については、学習の躓き、進路の迷い等が原因となったがカウンセリング及びタイムリーに相談に乗れる関わりと支援を継続していく。 ・卒業後の就業に関しては、就職ガイダンスを入学後の早い時期に実施している。地元への定着率が向上するよう毎年継続していく。（R7.4.24（木）実施予定） ・附属病院をもたない医師会立の学校では、学校教育・運営にあたり地元の病医院や地域の各機関・施設と密に連携をとり協力し合っていくことが重要となる。学校関連機関・施設の行事等へ学生がボランティアとして参加する等、交流・連携を引き続き深めていきたい。（本年度：信州医療センター・防災訓練参加、千曲荘病院・病院祭参加、上田市子育て家族応援事業のボランティア参加）

V 学生支援	・令和6年度カウンセリング件数10件。学生の心身のサポートにあたっている。教員もタイムリーかつ定期的に学習・学校生活の相談・支援を継続していく。 ・学生の経済的負担の軽減を目的とした高等教育修学支援新制度の対象校に認定される。また定期代・駐車場代の一部補助をR7年度より実施していく。
VI 教育環境	・昨年度からの課題となっていた学生トイレの洋式化は、予算の兼ね合いから、毎年一箇所ずつ進めていくとなった。本年度一箇所改修工事終了。 ・感染症のまん延防止を考え、各教室に加湿器に加え新たに高性能の空気洗浄機（エアドッグ）を配置し教室環境を整えた。 ・公立大学及び産院から、電動ベッド、リクライニング車椅子、高齢者体験セット、コーケンベビー、新生児用ベッドその他多くの教材の無償譲渡を受けることができた。必要な補修を施し活用していきたい。
VII 学生募集	・R5.6.7年度と定員割れの状態が続いている。 ・高校訪問、オープンキャンパス、ホームページアップ等に加え、テレビコマーシャル、広報うえだ、信毎、週刊上田に広く記事を掲載しアピールをしてきた。学校の特色（親身な指導と手厚い学生支援）をアピールしながら広報活動を強化していく。
VIII 財政	・ホームページで正味財産増減計算書等の公開をしている。 ・補助金、医師会からの繰入金に頼らない財政を目指すことが急務となるが、行政からの税制支援の継続が大きな課題となる。
IX 法令	・法令、専修学校設置基準などを遵守し、適正な運営を行っている。
X 社会貢献・地域貢献	・多くの学生が地元就職をしており、地域貢献への役割を果たしている。 (就業状況参照) ・本年度の特別講演会（作家：喜多川泰氏）は、一般参加者を週刊上田で募り約70名の参加となった。教育資源や施設の活用という面ではまだ十分ではないが、看護学生や学校を知っていただく機会となった。

令和 7 年度 上田看護専門学校 学校関係評価委員会 会議録

I. 日時：令和 7（2025）年 05 月 20 日（火） 午後 6 時 30 分～午後 7 時 30 分

II. 場所：上田市医師会 第 1 会議室

III. 出席者：11 名

（自己評価委員；学校教職員）

橋本 至永 （学校長）

鳥羽 泰之 （副学校長）

柳原 渉 （事務局長）

舟見 高子 （学校教務課長）

土屋 真澄 （学校教務課長補佐）

金井 幸子 （看護学科 3 年課程・教務主任）

三井 みどり （看護学科 3 年課程・教務主任補佐）

西沢 由美枝 （学校主務主任）

（学校関係者評価委員）

酒井 秀樹 （上田市教育委員会 教育長）

岡部 由美 （丸子中央病院 看護部長）

司会；三井みどり 書記；舟見高子

IV. 内容

1. 開会

2. 学校長挨拶

3. 自己紹介

4. 会議内容

1）学生の動向について（資料 1、2）金井主任、土屋課長補佐

2）R6 年度自己評価結果について（資料 3） 舟見課長

3）質疑応答

5. 閉会

質疑応答・助言

質疑応答者	質疑応答内容
《点数の客観性について》 副学校長 舟見課長	・自己評価点が上がったところと下がったところに対して明確な理由があるのか。あと、これは主観的なものだから各々比べてもしかたないことなのか。比較できるものでもないのか。 ・はじめての課程ということで、慣れなかった1年目に対して、課題検討をし改善、充実していったことがアップにつながっている。0.1、0.2等アップの根拠が明確なわけではない。
《学生の休憩室について》 学校長 金井主任 副学校長 学校長	・学生の休憩室については、解決しそうか。 ・使える部屋を、3年生が使っていたからほかの学生が使えなかったことになる。男子更衣室も全員が使えるほど大きくはない。 ・臨機応変に考え、本来1階は降りてはいけませんが、1階を使用してもよいのではないかと。騒ぎたいというのであれば無理だが、社会人として適切に過ごせるのであれば考えてあげていいのではないかと。 ・講堂の中までは無理であるが、ご飯を食べるぐらいなら講堂のロビーでもよいのではないかと。また、(事務局長も含め)検討してほしい。
《国試対策について》 副学校長 金井主任 学校長・副学校長 金井主任 副学校長 土屋課長補佐・金井主任	・国試対策は、特別のカリキュラムで行っているのか。 ・今年の3年生に関しては、やはり実習が終わらないと国試勉強に集中できない傾向にあるが、その前に模試をやったうえでその学生の課題をどうやって解決していくかの面談を含めてどうやって国試勉強をすすめていくかを個別的にアドバイスしている。すでに1年生には問題集の注文を取り、使用方法の説明を行っている。また必修問題(80%以上取る)もやり始めている。 - 本格的には11月の実習が終わってからの取り組みになる。 ・講師の先生達に最後の時間はどのような問題(国試で)が出るのかやってもらってもいいのではないかと。3年間で合格にもっていくのは5年からと比べると大変。なにか別の対策を考えることも必要か。 ・各先生方に過去問はお渡ししている。講義やテストなどに活用してもらっている。 ・やるべきことはやっている状態であるということになるか。 ・3年間のカリキュラムが実習・講義と過密になっているので、国試に向けての準備を整えることは大変な状況である。 ・実習に受け持った患者の疾患の理解を十分するよう伝えている。それは

副学校長	3年生だけでなく1・2年生に関しても同じ。 ・状況設定問題につながっていく。
《入学前準備》 副学校長	・「はたらく細胞」これを入学する前に学生に見てもらってもよいと思う。あれは、本当の言葉（医学用語）を使うし、参考になるという説が多い。サブスクで見れる。白血球、赤血球、凝固因子、マクロファージなどリアルにそのまま出てくる。擬人化しているのでわかりやすい。 👉ゼロ学年準備（入学前0T）として検討をしていく
《外国人学生受け入れ》 学校長・副学校長 酒井教育長 副学校長 舟見課長 副学校長 岡部看護部長	・外国人（学生）の受け入れについて市が支援していることはあるのか。 ・流入が多く市でも困っている。日本語が話せない状態で入ってきてしまう。学校がパンクしている状態。また、就労とどう結びつけるか課題。今、市ではオープンドアスクールという2年制の夜間中学を開設していこうと動き始めてはいるがまだ先のことである。そこで就労と結び付けられないか考えている。 ・技能実習生の部分に教育はかかわってくるのか。 ・直接教育とは関わってこない。ただし、N4を持っていると企業によっては、正規雇用者になれるところがある。だから中学卒業の資格（N3）が欲しいということはある。 ・看護学校はN1が求められる。 ・大学卒業レベルである。 ・ベトナムの技能実習生、今年2期生が入った。N4を持っている。苦労する部分もあるが、結構、会話はでき働きながら現在N2までとった。職種は介護である。これが現場につながってくるとよいが、3年で国に帰ってしまう。定着はしていない。
《教育活動について👉実習体験による学生の変化》 酒井教育長	・実習をする中で専門的知識が座学的な知識から本当に必要な知識に代わってきたということ…。大学生が教育実習をやることで、座学的な知識から、私はそれを一人称の知識が2人称の知識に変わったと言っている。自分ために資格を取りたいという勉強から、子どもなり患者さんのためにとという動機からの勉強になり、知識の習得の仕方が変わってくる。ここが全く（大学生の教育実習と）同じだなと感じた。
《広報活動について》 岡部看護部長	・佐久方面の看護師が面接に来た。その看護師は、上田に看護学校があることを知らなく、群馬の看護学校に行ったということだ。佐久は上田と近

舟見課長 岡部看護部長 副学校長 岡部看護部長 酒井教育長 副学校長 酒井教育長 岡部看護部長	いような気がするが、知らない人がいるということに驚いてしまった。CM等で紹介もしているがどのような広報活動をしているのか？ ・佐久、小諸方面にある高校を訪問している。 ・昨年、看護師募集で県内の看護学校を訪問したが、中学まで募集に回っていると聞いた。 ・中学まで視野に入れることが必要だ。職場体験はまた復活するのか？ そういう時に、中学生向きのパンフレットを作成してみよう。高校生と内容を変えて。 ・病院で職場体験をする中で学校の紹介も可能。7月には職場体験が入ってくるので、ポスター等準備してもらえれば紹介できる。 ・5月の初めに職業ということでそれぞれの学校で、働くってどういうことなのか全体講師として話してくれる人がいる。多分それを持ち回りでやっていると。中学校に行って、医療の現場から魅力なども話せるし、働くとはどういうことなのかという観点で、学校に言っていただければ受け入れてくれると思う。5月中に動き始めると思う。 ・医療の現場で働くということになると看護師だけでなく、いろいろな職種があるので、公平性が必要になる。難しい。 ・職場体験では、人と関わる仕事ということで人気が高い。看護師、介護、障害、福祉関係などはイメージがしやすいため好まれる。そういうことから学校の先生たちは、5月の時、技術系の先生を呼んでいる。そこに入っていただければ・・・子供たちは興味を持っている。教育委員会のほうからはなかなか言えない。学校に主体権がある。来年度の年間計画に入れるということで連絡を取ってみてはどうか。赤ちゃんのシミュレーターなどもっていけば興味がわくのではないかな。
《タブレットを使っ ての学習方法について》 金井主任 酒井教育長 金井主任 副学校長	・中学の学習ではタブレットを使っているか。 ・使っている。ノート感覚で使用。学校から一人1台支給（コロナ時から）。教科書と併用。国はタブレットへの移行を進めている。5年前から、使い始めているので19～20歳の子はすでにひとり1台手にしていた学生である。 ・学生たちは手元に資料があると、タブレットを開かない、開けないということがあり状況をお伺いした。 ・文脈の前後が見れるので紙のほうが良いと思う。技術など動きがある教材はタブレットが良いが…。これは、もう学生個々がやりやすいほうでやるということではないか。

以上、質疑、助言をいただくとともに、R6年度の自己評価について承認を受ける。